

暗一が見た夢

吉岡 宥輝

「シユート! . . . げっ。」

おれは学校の昼休みにサッカーをしていて、ボールを思いきり、けつたら、おにごっこをしていた安の顔に当たってしまった。

「暗一、謝れよ。」

安が大きな声で言う。周りも集まってきてじろじろ見られた。イライラして

「お前とはもうしゃべらん。」
 と言ってやった。

下校途中もイライラは続いた。川の近くを見ると、ねこがゆつくり休んでいる。足元に大きめの石があったから、ねこに向かつてつけてみた。どうせサッカーの時のように全然違う方向へ飛んでいくんだ。

しかし、大きな石はねこの体に当たって、ねこはゆつくり川へ落ちて流されていった。

心配を感じてはつと振り向くと、そこにはサッカーをしていた連中と安が、おれをにらんでいた。見られていたか。急ぎ足で帰ろう。

みんなとは違う森の抜け道を通ることにした。途中、急に風が止んで、日光が木でさえぎられた。そこまで暗くはなく道は見えたが、後ろから足音が聞こえた。気味が悪くなつてきて小走りをした。後ろを見ると小さい足あとがついてきた。木にはなぜか血がついている。

急にチャボンと水がはねる音がして、うなり声が聞こえた。身ぶるいをしたら、背後に誰かいるのを感じた。振り払うように走つて、そこから近い安の家へ行つた。

「安、中に入れてくれ。」

と叫んだが、

「おれとはしゃべらないんだろ。」

と言われ家に入れてもらえなかった。おれはまた走つた。真つ暗になつて追いかけてくるのが何かはつきりわかつた。青い三つの火の玉と、血まみれになつているねこが二本足で追いかけてきた。

つかまらないよう必死に走り、やっと自分の家に着くと、もう一人の自分がいた。

もう一人の自分がたりと笑つた。